

[ここに入力]

令和2年度 第1回 川崎市小学校教育研究会 報告書

図画工作科	会場	新城小学校			
	助言者	東大島小学校 校長 紺野 清美 生田小学校 校長 松崎 哲範			
令和2年11月4日(水)	授業者	新城小学校		田口 雅之 早野 香苗	
	司会者	新城小学校		鈴木 貴久	
	記録者	柿生小学校 川中島小学校		梅津 優理 眞砂野 礼	

「□□、大地に立つ ～土から生まれたわたしの絵～」

1 研究協議の概要

○協議・質疑応答

- ・土という身近な材料を扱うことで、可能性が広がる題材であった。
- ・経験の少ない材料であることから、試す時間の確保がされていてよかった。

⑧土絵の具から、土関連の絵に表すこともよいとするのか、別の物に表す方がよかったのか。
→地平線を描くことは一つの手立てなので、どちらでもよいと思う。

⑨色をプラスした方がよかったのか、そのままの土絵の具で表すことがよかったのか。

→子ども達の自己決定でよい。ただ、乾くと色が薄くなるため、乾いてから色を追加したいという子どももいた。手段だけ伝え、最後に選択するのは子ども自身。

⑩土に加えるのは、ボンドか洗濯のりどちらがよいのか。

→ボンドは水場に詰まったり、べたべたとしたりして扱い辛い。そのため、洗濯のりの方が扱いやすいと感じた。

○指導講評（東大島小学校校長 紺野清美先生）

・意識させるといふこと

「大地」というテーマについて、深海や地平線を描かない児童については、どのようにイメージを広げたのかが大切である。自己決定を大切に、活動ができるようにした。接着については、ボンドよりも洗濯のりの方が扱いやすかった。

・試す時間の確保

・何気ない日常の中から色を意識して過ごせるようにするための声かけが必要。身の回りの物の色の違いに気づけるよう導くことで、土に対しての意識が変わった。また、試しの時間を多くとることが有効だった。何度も試すことによって土が乾いたときの色の変化等に気づき、造形遊びとは異なる活動になる。

・鑑賞の仕方について

最後に鑑賞し合い、作品についてのカードを交換するなどの活動ではなくて、途中鑑賞を行うことで、自分の作品と向き合うことができ、友達と自然と対話することができた。

今回の題材では、子ども達自身が新しい発見をすることができたということがこの題材のよさである。授業は、教師自身が楽しくなければ、子ども達も楽しくない。コロナ禍で、安全に活動ができるように手洗い等衛生面に気を付けてできるように気を付けるべきである。



[ここに入力]

「5-3 STUDIO ～わたし・ぼくはアニメーター～」

1 研究協議の概要

○協議・質疑応答

・流れが明確（研究編→製作編→）でのびのびと活動していた。

⑧ グループ活動のメリット・デメリットがある中で、どのようにグループを組んだのか。

→人間関係を考慮して意図的に組んだグループである

→一人一人のアイディアを必ず取り入れるようにした。

・個人では、形にならない子も出てきてしまうことも予想。

⑧ 撮影しやすくするための手立てはどの程度おこなったのか。

→固定できるように段ボールを改造して教師が用意した。

→アップとルーズのみ伝えた。また、子どもたちの作品の中からでたことを共有して技法としてまとめていった。

○指導講評（生田小学校校長 松崎 哲範先生）

「やってみようかな」という前向きな気持ちを持たせてくれた。高学年ならではの育ちを生かしながら、実態に合わせた授業づくりだった。題材名からも、教師の題材に対する思いが伝わる。

研修編から、教師側が緻密に見通しをもった流れで組まれている。子ども達が出来た！という手ごたえや安心感を得られるようにしている。また、それらを共有することで発想の広がりをもたせ、次時への期待をもたせている。タブレット端末の利用をすることで、図画工作に苦手意識をもっている児童も楽しみながら活動することができる。

<造形的な見方・考え方が働くような手立てから>

○コマ撮りだからできる

個人のアイディアを出し合うことができる。

様々な動きを共有することができる。

コマをたくさん撮る活動をすることで、タブレットの扱いに慣れていく。

○身近材を使った主人公

動くはずのないものを動かすことができる。

そうすることで楽しく活動していた。

粘土などを使うことで、想像の幅が広がったと思う。

○チームで作製

個人持ち寄って、グループで表すことでハードルが一段階上がり、対話的な活動が生まれている。互いの良さや個性を尊重して（指導要領より）にもあるように、自分たちだけの一体感をもって活動に取り組むことができている。

